

## 第2回留学レポート

法文学部社会文化学科3年 新田欧介

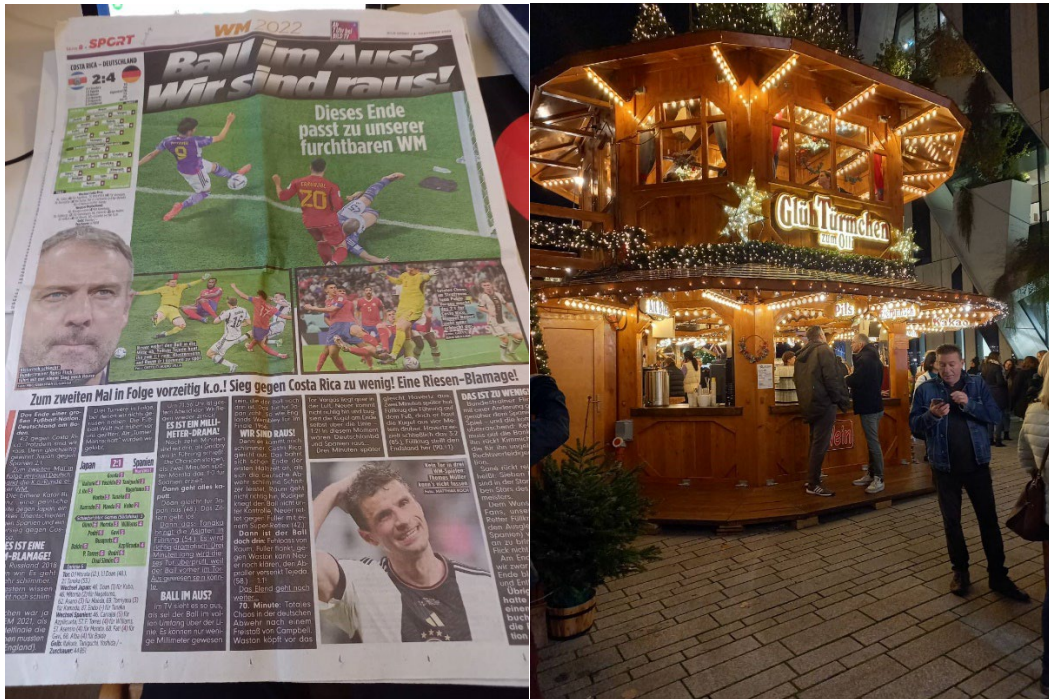
### ○最近の暮らしと考えたこと

時間が経つのは早いもので、ドイツに来てからもう3ヶ月が過ぎてしまいました。渡航した直後は早く帰国することばかり考えていたのですが、最近はこちらに来てからできた友人のおかげで多少は寂しさを紛らわせることができているようです。島大にいた頃は授業をたくさん取っていて正直毎日苦しかったのですが、こちらに来てからは授業数がぐっと減ったのでその分浮いた時間を使って自分のしたいことができているような気がします（もちろん多くの授業を受けるためにドイツ語能力が高いに越したことはないのですが...）。ひとまず、この数か月間で、自分の中である程度生活リズムが確立できたのでそれに従って日常生活を送っています。図書館に行ったり、授業に行ったり、市内を見て回ることも自分にとっては大切な時間ですが、毎日勉強をすればするほど自分の語学力の低さに失望してしまい、過去の不勉強を嘆くことも少なくありません。留学してから学ぶことはもちろん重要ですが、留学するまでにどれだけのことを詰め込んでおくのかも充実した生活を送るためにやはり大事なのだと痛感しています。

最近はクリスマス休暇の影響で2週間ほど大学が閉まっており、多くの友人が地元に戻ってしまったので朝起きてドイツ語のニュースや新聞を見たり、英語の勉強をしたりしてゆっくり時間を過ごしています。一人でいる時間が増えてしまったので孤独感をぬぐうことが一番の課題です。ただ、ベルリンやハノーファーなど実家が遠く、クリスマスに帰省しない友人とはトリア市内で相変わらず一緒に買い物に行ったり、タンデムをしたりして過ごしています。日本や他の国から来ている留学生もこの期間中に旅行へ行く人が多いので学生寮に残っている人は本当に少ないです。母国語を使わないことが語学力向上への近道だとは思いますが、何日間も誰とも話すことがないと精神がやられるので皆さんは気をつけましょう。若干鬱っぽい語り口になってしまいましたね...。風邪のせいにしておきます。



(下：クリスマスマーケット期間中のトリアの様子)



(左上：『三苦の1mm』とドイツのグループリーグ敗退を伝える新聞

Ball im Aus? →ボールは出ている？ Wir sind raus! →私たちは出た=負けた)

(右上：Glühwein を販売しているデュッセルドルフの屋台)

### ○タンデムについて

前回のレポートでも書きましたが、空いた時間でドイツ人の友人と互いの言語を教え合うタンデムという学習を2か月ほど継続してやっています。パートナーは3人いて、教え合う内容は人によって異なります。お互いの身の上話をしたり、日本の昔話をドイツ語へ翻訳したり、ドイツの新聞を一緒に読んだり、サッカー選手のインタビューを聞き取ったりと多岐にわたりますが、毎回自分が知らない表現に出会えるので本当に楽しいです。将来的に外国に留学することを考えている、もしくは島大にいる留学生とタンデムをしてみたいと思う人がいるなら、全体の時間のうちの半分を相手の言語だけ、もう半分をその言語と日本語を交えて会話するのが個人的にはおすすめです。ちなみに私たちの会話のトピックは単なる四方山話だったり、最近の経済の話だったり、それぞれの地域の歴史についてだったり、バロック音楽の話だったりしますが、どれについて話しても新しい発見があります。もちろん、会話には具体的なゴールはありません。そのため、日本語が堪能なドイツ人にとっても日本人の私と喋るだけで予想外の新しい知識や表現を知れるらしいので、それに関してはとても嬉しく感じます。逆にそういった友人からすると、私が普段使わない珍しいドイツ語（die Sekte、die Fuge など）を知っていると驚かれることもしばしばあります。相手の語学力が高ければそれに甘えることも多いですが、ドイツ語のできる限り分かりやすく表現し

ようにすることが一番大事だと思っているので、毎回自分の頭をフル回転させて言葉を紡ぎ出しています。



(デュッセルドルフの日本食レストランと書店)



(左：日本人1人だけで観戦した日本ードイツ戦、右：WM 期間中の特別仕様のコーラ)

### ○デュッセルドルフ

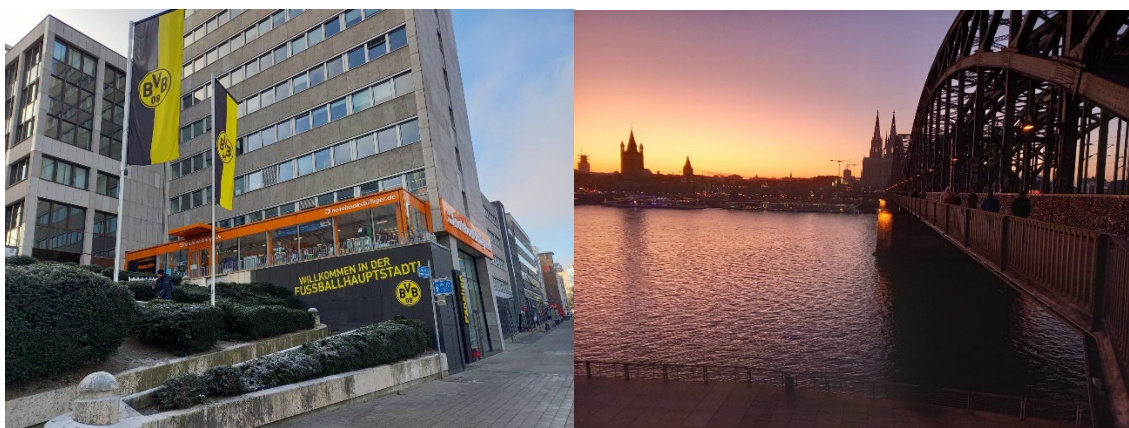
ヨーロッパでは例年11月中旬からクリスマスマーケットが開かれ、町は昼も夜も賑わいます。もちろんトリアでも開かれてはいるのですが、田舎町ということもあり規模はさほど大きくありません。そのため、より大きいマーケットを見るためにこの2か月間で何度か遠出をしてきました。

マーケット期間が始まって最初に行ったのはデュッセルドルフです。この町は日系企業が多く進出しており、ヨーロッパでも屈指の日本人コミュニティが形成されていることで知られています。日本食レストランも多く、価格設定は高めですが日本と変わらない味を楽しむことができるので、留学中に日本の味が恋しくなったら訪れることをおすすめします。この町はノルトライン・ヴェストファーレン州の州都ということでドイツの中でも都会な方だと思います。マーケットが展開されている場所が何箇所もあり、町全体を彩るイルミネーションはドイツで訪れた都市の中でもひと際美しかったです。食べ物は専ら日本食レス

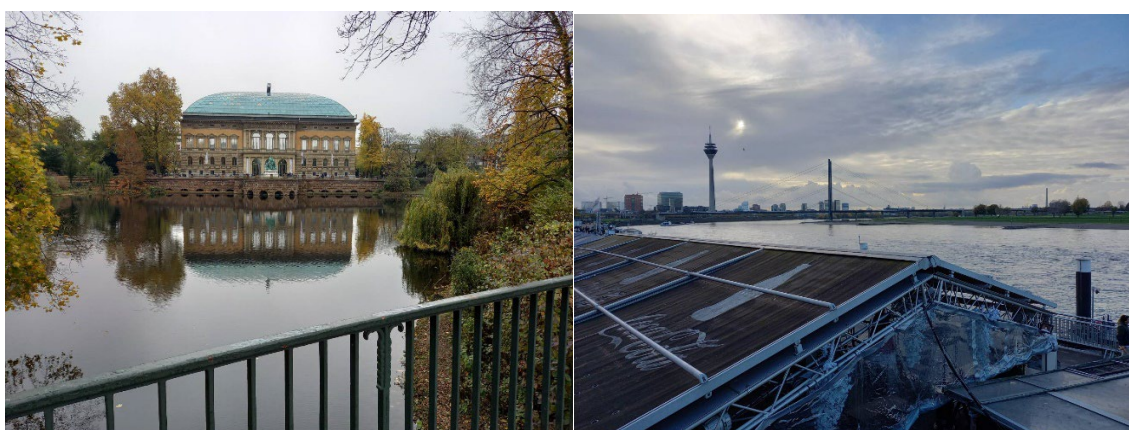
トランで食べたので、マーケットで売られているものの良し悪しは正直なところ分かりません…。普通のお店で買うよりは幾分か高い印象です。また、デュッセルドルフは美術館や博物館が多い町でもあるので芸術や歴史に興味のある人にもおすすめです。



(ドルトムントの Fußball Museum)



(左：BVB のファンショップ、右：大聖堂の対岸から望むライン川とケルンの夕景)



(左：デュッセルドルフの K21 州立美術館、右：デュッセルドルフを流れるライン川)



(左：45mあるドルトムントのクリスマスツリー、右：ボンのベートーヴェン像)

#### ○ドルトムントーケルンーボン

2週間ほど前には3日間かけてドルトムント、ケルン、ボンの3都市に行ってきました。ただ、3日もとも気温が-6度前後だったので手袋や厚めの靴下がさして役に立たず、身体が終始重かったです。

ドルトムントに関しては、香川真司が数年前までボルシア・ドルトムントに所属していたので、町の名前に聞き馴染みがある人は多いのではないのでしょうか？私自身サッカーにそれほど詳しいわけではないですが、この土地で訪れた場所で一番印象に残ったのは中央駅の目の前にある Fußball Museum でした。この博物館ではサッカードイツ代表の歴史やサッカー全般の歴史についての展示がされており、この国のサッカーに対する深い愛情を感じることができました。展示自体はそれほど難しい内容ではなく、解説文も英語とドイツ語の二ヶ国語表記だったのでゆっくり読めばきちんと理解できる内容でした。博物館を訪ねた後はその斜め向かいにある BVB のファンショップで日本の友達宛にお土産を買いました。直接渡せる日が待ち遠しいです。

2日目は風邪を拗らせて体調が悪かったので、正直言って印象に残ることは初日に比べて少なかったです。北ヨーロッパ最大級のゴシック建築であるケルン大聖堂周辺の景色は確かに美しかったのですが、それよりも寒さで身体が悲鳴を上げていたのでボンのホテルに着いたときに、いつも以上に生きている喜びを感じました。3日も相変わらず厳しい寒さだったのですが、多少体調が回復したのでクリスマスマーケットやボン出身のベートーヴェン関連の名所をゆっくりと回りました。ベートーヴェン・ハウス (ベートーヴェンの生家

および博物館)では彼が実際に認めた手紙や楽譜、使用した楽器などが展示されていたほか、学芸員の方に貸していただいたヘッドフォンで様々な楽曲を聴くこともできました。クラシックが好きな人は一度訪れてみてもいいかもしれませんね。



(左：ケルンのクリスマスマーケット、右：マーケット期間中のトリアの様子)

#### ○ドイツで3ヶ月を過ごして

留学してから考えたことは前半に多少あけっぴろげに記したのですが、それでも書ききれないほど多くの経験や気づきがこの数か月間でありました。一番大きな気づきは自分がこの国で生きている限りは当然ながら外国人として扱われ、ときどき差別を受けてしまうということです。先月もトリア市内を歩いているときに何も言われずに若い黒人の男性に唾を吐かれましたし、別の日にもすれ違いざまに不快な言葉を浴びせられたことも2度ありました。最初にはっきりと差別を経験したときはその場を立ち去って30分ほどは涙が止まりませんでした。ドイツ人の多くが差別の感情をはっきりと示すわけではありませんし、優しい人がたくさんいることも事実です。泣いているときに「どうしたの？大丈夫？」と声をかけてくれた老紳士もいましたし、言葉が通じればバスや電車の中で親しげに世間話をしてくれる人も老若男女問わず存在します。ただ、差別する人々には特段の理由がない場合もありますが、歴史的な背景やかつての日本、近年加速しつつある中国の膨張などを理由とするアジアへの拒絶的な感情があるのだと思います。だとしても、到底差別を許すわけにはいかないですが...。今回の経験を通して差別がいかに不快なものかは身をもって体験しましたし、それ以上にそういった感情がどこからやってくるのかを明らかにするのが歴史学専攻の一学生としてもグローバル化が進む世界に生きる一人の現代人としても肝要なこと

のように思われます。こういった厳しい経験も増えるかもしれませんが、限られた時間で納得できる留学生活が送れるように残りの日々を過ごしていきます。



(左：肝臓を破壊する酒、右：酒に強い心優しい友人たち)